



北方文化博物館の藤棚 北方文化博物館提供

## 砂丘に残る祖先の足跡

江南区は、平野部で最も古い砂丘列とその周りに広がる低湿地が大部分を占める地域である。

縄文時代、この地域の砂丘の周囲には水面が広がっていた。砂丘上にある笹山前遺跡(蔵岡・笹山)では縄文前期(約6,000年前)の深鉢形土器のほか、縄文晩期(約2,500年前)の小形の壺形土器が出土している。壺形土器は赤色顔料のベンガラが入った状態で出土し、貯蔵用あるいは携帯用の容器として使われていたと考えられる。

砂丘列の成長が、信濃川、阿賀野川の排水を阻むようになると、砂丘の周囲は湿地へと変化した。西郷遺跡(茅野山)からは、炭化した米が出土しており、すでに弥生時代中期(約2,000年前)には、稲作が行われていたことが分かる。

江南区域は信濃川・阿賀野川に挟まれた地域で、<sup>せき</sup>潟湖も点在していたことから、内水面交通が発達した。平安時代前期の駒首潟遺跡(亀田早通)からは、越前国(福井県)の豪族「足羽臣」の名が記された木簡が出土している。



ベンガラの入った壺形土器  
笹山前遺跡出土



習書木簡 駒首潟遺跡出土  
三行目に「足羽臣」と見える。

## 新田の開発により生まれた村々

江戸時代、江南区の多くは新発田藩領となった。<sup>よこ</sup>横越は、蒲原横越組の大庄屋小林家・建部家の所在地として、横越島の100を越える村をまとめる政治の中心地となった。<sup>そらみ</sup>沢海には、沢海藩が一時期置かれた。

江戸時代以前から横越島では河川の自然堤防や砂丘の微高地に村が形成されてきた。その後、「草分」と呼ばれる有力農民等による低湿地の新田開発が進められた結果、中谷内(亀田)や丸潟、鶺ノ子など、今日に続く多くの村々が成立し、亀田郷では寛永年間(1624~44)の末までに50か村にもなった。各村々の耕地も拡大し米の生産高も飛躍的に増加し、鍋潟新田では元禄13(1700)年と天保5(1834)年を比べると、約10倍にもなっている。



寛永16(1639)年「横越島絵図」個人蔵(市指定文化財)



## 舟運を使った市場と商品作物の広がり

「亀田八景」には江戸時代の亀田の代表的な風景が描かれている。描かれた場面のひとつに「乗落の帰帆」がある。「乗落」は船着き場があったところの名で、新潟や沼垂と亀田を往復する船で栗ノ木川の船着き場が賑わう様子を伝えている。縦横に走る河川や堀、烏屋野潟等の湖沼を利用した舟運によって、亀田や酒屋は在郷町となった。両地域では現在も六斎市が開催されている。

江戸時代半ばから沢海でタバコ、二本木・両川・亀田でナシや梅（藤五郎梅）などの商品作物が栽培され、綿織物（亀

田縞）の生産も始められた。亀田縞は農作業着として重宝された。ナシと梅は、現在も特産品として栽培されている。

大倉南岱画 梅田順亭讀  
「亀田八景」乗落の帰帆  
弘化4(1847)年 個人蔵



## 水とたたかった人々の営み

信濃川、阿賀野川等に囲まれた低湿地であるこの地域は、大正2(1913)年の木津切れ、同6年の曾川切れに代表される水害の多い地域であった。また、田んぼに溜まった雪解け水や雨は容易には引かなかった。農民は水に浸かり、田舟を使って稲作に取り組んだほか、小規模排水機の設置や、河川の改修なども行った。冬季には農家の貴重なタンパク源である魚介を獲り、ドジョウを首都圏に出荷していた。

沢海の伊藤家は江戸時代の後期から土地を集積しは



木津切れで避難する亀田上町の人々 江南区郷土資料館所蔵

じめ、多くの小作人を抱え、大正13年には所有耕地1,346町歩を誇る県内でも有数の大地主として成長した。明治40年代からは米の品評会を開催したり、農事講習会を開いたりして、小作人たちが優良な米を作ろうとする環境を形成した。現在、その家屋敷は「豪農の館・北方文化博物館」として、往時の繁栄を紹介する観光スポットとなっている。



深田での稲刈り後、田舟で運搬する農民  
昭和23(1948)年頃 本間喜八氏撮影 亀田郷土地改良区所蔵

## 「地図にない湖」を美田にした土地改良

昭和23(1948)年、人々の悲願であった国策による栗ノ木排水機場が完成し、亀田郷6,000haの大半で大規模な土地改良事業が進められた。農地改革による小作農の自作農化とあいまって、農民は耕地整理組合や土地改良区をつくり、農地の区画整理などに努めた。佐野藤三郎を中心とした亀田郷土地改良区の先進的な取り組みは、国内外で高く評価された。その結果、「芦沼」や「地図にない湖」と呼ばれた亀田郷は、豊かな美田へと変貌した。

その後、新潟地震の災害復旧事業の一環として親松排水

機場が設置され、亀田郷は完全に乾田化した。



耕地整理作業中の人々  
本間喜八氏撮影 亀田郷土地改良区所蔵

## 交通の利便性を生かす地域の変貌

昭和40年代に入ると、市中心部の更なる都市化に伴って急激に人口が増加し、農地は宅地へと変化した。交通量も増大し、昭和49(1974)年には亀田バイパスが全線開通した。また、インターチェンジや亀田駅の近くなどには複数の工業団地が造成され、多くの企業が誘致された。

その後も、昭和63年には北陸自動車道が、平成6(1994)年には磐越自動車道が開通するなど、高速交通網が整備さ

れ、大型商業施設が進出し、広域からの集客力を強めている。平成の大合併により、さらに大きな変貌を遂げている。



亀田バイパス沿いの排水路と左に見える工業団地